Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-23

自然災害後の高齢者の心理的変化 : 阪神・淡路大震災後の高齢者のリソースの喪失状況

清水, 美生 ; 川畑, 摩紀枝 ; 石川, 雄一 ; 矢田, 眞美子 ; 松田, 宣子 ; 宮脇, 郁子 ; 津田, 紀子 ; 土肥, 加津子 ; 矢本, 美子 ; 野崎, 香野 ; 村木,…

(Citation)
神戸大学医学部保健学科紀要,14:11-16

(Issue Date)
1998-12-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00181854

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00181854

KOBE UNIVERSITY

自然災害後の高齢者の心理的変化

－阪神・淡路大震災後の高齢者のリソースの喪失状況－

清水美生,[1] 川畑摩紀枝,[2] 石川雄一,[2] 矢田眞美子,[2]
松田宣子,[2] 宮脇郁子,[3] 津田紀子,[2] 土肥加津子,[2]
矢本美子,[4] 野﨑香野,[5] 村木敏明,[2] 長尾徹,[2]
米田稔彦,[2] 瀬藤乃理子[6]

緒　言

大災害は人々の生活環境を破壊する。特に，疾病をもちながらも在宅で生活している高齢者にとっては，ライフラインの遮断を始めとする予測のつかない生活を強いられることは，困難な状態であると考えられる。高齢者は一旦健康障害が生じたり，生活機能が低下するとその回復は困難であるとともに，生きる意欲に対しても影響を及ぼしやすい。

通常，高齢者は加齢に伴い社会的役割や経済面において様々な喪失体験をしているが，各々の生活を充足させるために，いろいろなリソースを活用している。しかし大きな出来事に遭遇しリソースそのものが失われると危機状況になることが予測される。自然災害は劇的に個人のリソースを奪う[1]と言われており，高齢者の災害後の心理的影響を明らかにすることは重要である。

1995年の阪神・淡路大震災は未曾有の大災害をもたらした。わが国では災害後の高齢者の生活に関する研究[2-5]はみられるものの在宅高齢者の心理に関する研究は少ない。このような大災害において高齢者がどのようなリソースを喪失し，心理的変化に遭遇したのかを明らかにすることは，災害時の看護支援システムを開発するために重要な課題であると考える。

今回の我々の研究は被災した高齢者の震災後の心理的変化を明らかにするために，災害後のリソースが6カ月後と15カ月後でどのように変化したのかを調査したので報告する。災害などのストレスフルな出来事の結果引き起こされる心理的状態は，その個人のリソースの喪失の程度や認知の仕方に影響されるというCOR理論[6](The Model of Conservation of Resources)を概念枠組みとして用いた。リソースとは，個人にとって価値があり役立つとされた「物質」「個人の特性」「状況」「エネルギー」であると定義されている。「物質」は，食物や車，家など生活するために必要となる所有物であり，「個人の特性」はストレスに対する抵抗力を高めるリソースで，愛情や価値観や感情などである。「状況」はある目的のための固有の役割を示すリソースで結婚や昇進などであり，「エネルギー」は他のリソースを得るために使われるもので，財力，知識，信用などである。

1．兵庫県立看護大学大学院修士課程
2．神戸大学医学部保健学科
3．東京医科歯科大学大学院博士課程
4．三重大学医学部看護学科
5．日本看護協会神戸研修センター
6．元神戸大学医学部保健学科

対象と方法

1．対象者

対象者は，神戸市内に在住し福祉機関からホームヘルプサービスを受けている60歳以上の在宅高齢者で，調査に同意し自らインタビューに答えることの可能な72人（男性16人，女性56人）とした。平均年齢は男性82.3歳，女性80.3歳で独居が32人（44.4%），家族と同居が40人（55.6%）である。家屋の被害状況は，全壊11人（15.3%），半壊27人（37.5%），一部損壊・損失23人（31.9%），損壊なし11人（15.3%）である（表1）。

表1　対象者の背景

	男性　n=16 N（%）	女性　n=56 N（%）
年齢		
60歳代	2（12.5）	4（ 7.1）
70歳代	2（12.5）	20（35.7）
80歳代	11（68.7）	30（53.6）
90歳代	1（ 6.3）	2（ 3.6）
家族形態		
同居	8（50.0）	32（57.1）
独居	8（50.0）	24（42.9）
家屋の被害の程度		
全壊	3（18.8）	8（14.3）
半壊	6（37.4）	21（37.5）
一部損壊・損失	4（25.0）	19（33.9）
損壊なし	3（18.8）	8（14.3）

2．方法

家庭訪問による聞き取り調査で，質問はHobfollの災害時リソース喪失測定用に考案された52項目[6]をもとにした。日本人高齢者の特性を考慮し，我々は高齢者に適応可能な28項目を抽出した。調査後，因子分析の結果，因子負荷量0.4以上の3因子17項目を「The 17 Item Resource Questionnaire（17RQ）」として抽出した。表2の17項目がCOR理論の4つの分類のどれに該当するかをみると，11～14の項目が「物質」に，1，4～9の項目が「個人の特性」に，また10,15～17の項目は「状況」に，3は「エネルギー」に該当する。我々は3因子に，構成内容を基に次のように命名した。生活意欲や体調などが含まれる「自己維持に関するリソース」，家財道具など物質的なものが含まれる「生活維持に関するリソース」，社会や人とのつながりが含まれる「社会交流に関するリソース」である。それぞれの寄与率は順に20.81%，14.17%，12.48%，でCronbach α の信頼性係数は，順に0.88，0.77，0.83であった。得点は0点から3点の4段階のリッカート尺度で，得点の高い方がリソースの喪失が大きいことを示す。

調査時期は第1回目を平成7年7月～8月（震災6カ月後）に，第2回目調査を平成8年3月～4月（震災15カ月後）に行った。2時点とも震災前を基点として各リソースをどの程度喪失したのかを調査した。

震災6カ月後と15カ月後の17RQの平均得点の比較をt検定，また2時点間の得点の変化の傾向をみるためにピアソンの単相関分析を行った。

結　果

震災6カ月後の17RQの得点状況を表2の各項目の平均値でみると，「自己維持に関するリソース」において男性5.19，女性が5.55，「生活維持に関するリソース」では男性2.38，女性1.89，「社会交流に関するリソース」は男性2.06，女性1.68であった。また15カ月後の「自己維持に関するリソース」では男性6.25，女性4.93，「生活維持に関するリソース」では男性2.38，女性1.66，「社会交流に関するリソース」では男性2.13，女性1.73であった。いずれも平均得点は低い傾向にあった。また2時点の平均得点に有意な差は見られなかった。

項目別に平均得点をみると男女とも同じ傾向を示した。「自己維持に関するリソース」では，「体の調子」が最も得点が高く，次いで「自分の生活を思うようにできる感じ」「人生は

穏やかであるという感じ」「何かをやろうとする気持ち」の順で得点が高かった。「生活維持に関するリソース」では「家財道具」が，「社会交流に関するリソース」では「友人とのつながり」の値が最も高かった。

表3に震災後6カ月と15カ月の17RQの得点の相関関係を示した。全てのリソースにおいて相関係数が0.40以上（$p<0.05$）であり，6カ月後の得点が高い人は15カ月後も得点が高い傾向を示した。

表2　17-RQのリソースの項目と震災後6ヵ月と15ヵ月の平均得点

	男性（N＝16）		女性（N＝56）	
	6ヵ月後	15ヵ月後	6ヵ月後	15ヵ月後
リソースの項目	M（S.E）	M（S.E）	M（S.E）	M（S.E）
自己維持に関するリソース	5.19（1.78）	6.25（1.78）	5.55（0.91）	4.93（0.85）
1. 誰かに必要とされている感じ	0.19（0.19）	0.56（0.22）	0.27（0.10）	0.21（0.91）
2. 家族の安定性	0.19（0.14）	0.19（0.10）	0.36（0.12）	0.21（0.08）
3. 自分の自由になる時間	0.62（0.30）	0.31（0.22）	0.46（0.12）	0.50（0.14）
4. 人生の目標を達成しようとしている感じ	0.50（0.26）	0.63（0.27）	0.14（0.07）	0.36（0.12）
5. 楽観的な感じ	0.50（0.27）	0.75（0.30）	0.50（0.13）	0.45（0.13）
6. ユーモアの感覚	0.19（0.19）	0.50（0.22）	0.45（0.13）	0.34（0.12）
7. 自分の生活を思うようにできているという感じ	0.89（0.30）	0.75（0.33）	0.75（0.15）	0.70（0.15）
8. 人生は穏やかであるという感じ	0.56（0.24）	0.50（0.27）	0.82（0.15）	0.48（0.12）
9. 何かをやろうとする気持ち	0.63（0.29）	0.88（0.32）	0.70（0.15）	0.61（0.16）
10. 体の調子	1.06（0.31）	1.06（0.28）	1.11（0.15）	1.07（0.15）
生活維持に関するリソース	2.38（0.96）	2.38（0.74）	1.89（0.33）	1.66（0.35）
11. 家財道具	1.00（0.32）	1.13（0.30）	1.05（0.15）	0.80（0.15）
12. 思いでの品	0.69（0.30）	0.75（0.31）	0.52（0.12）	0.54（0.13）
13. 衣類	0.38（1.26）	0.31（0.15）	0.18（0.09）	0.23（0.10）
14. 食糧	0.31（0.20）	0.19（0.10）	0.14（0.07）	0.09（0.05）
社会交流に関するリソース	2.06（0.68）	2.13（0.74）	1.68（0.33）	1.73（0.38）
15. 友人とのつながり	0.88（0.30）	1.06（0.35）	0.70（0.16）	0.75（0.15）
16. 地域の人々からの助け	0.50（0.22）	0.44（0.24）	0.32（0.11）	0.32（0.11）
17. 仲間づきあい	0.69（0.27）	0.63（0.27）	0.66（0.14）	0.66（0.15）
17-RQの3因子の平均の比較にはt検定を用いた				

表3　3因子における6ヵ月後と15ヵ月後の得点の相関係数

	男性（N＝16）	女性（N＝56）
自己維持に関するリソース	0.63**	0.59***
生活維持に関するリソース	0.51*	0.42***
社会交流に関するリソース	0.64**	0.42***

*P＜0.05　**P＜0.01　***P＜0.001

考　察

対象者は震災前ホームヘルプサービスを受けていた虚弱老人であり，リソースの喪失程度が高いことが予測された。しかし6カ月後と15カ月後の調査の結果いずれも得点が低く，失ったリソースが全体として少ないことが明らかになった。これは，被害がありながらも住み慣れた家で何とか生活ができたことがリソースの喪失を抑えることにつながったのではないかと考えられる。このことは在宅被災者は仮設居住者に比べストレス反応が軽減されるという野々山らの調査[7]からも裏付けられる。

しかし，項目を見ていくと「体の調子」の喪失得点が高く，多くの人が震災により体調を崩していたことが明らかになった。これは，高齢者が通常でも健康障害を起こしやすい冬の寒い時期に震災が起こったことに加え，ホームヘルパーによる受診時の付き添いが中断されたことや，交通機関の遮断をはじめとする環境の変化により，かかりつけの病院に行きにくくなった事などが健康障害に拍車をかけたと考えられる。災害は高齢者の健康を支えている生活環境やサポート体制を崩してしまう。高齢者は些細なことで健康障害を起こしやすく不可逆的になりやすいため，生活環境の変化を最小限に食い止め，社会資源の利用が継続できる体制を作っていく必要がある。

また，松村らの研究では[8]，高齢者が最も生きがいを喪失するのは，いずれの年齢層においても健康がすぐれないと感じる時であるという。今回の結果で「何かをやろうとする気持ち」「自分の生活を思うようにできる感じ」の喪失が「体の調子」に続いて多かったことはこのことを反映するものといえる。災害後は身体面，心理面の両方の変化をとらえ，健康障害を把握し生活機能を衰えないようにはたらきかけることが重要である。

6カ月後と15カ月後の個人の得点は正の相関にあり，6カ月後の時点で得点の高い人は15カ月後も同様に高いことを示した。加齢に伴う喪失を含むもともとリソースの少なかった人，及び震災により少なくなった人において，リソースの喪失が続く可能性があると考えられる。自然災害は，急激に予測できない多種多様のリソースを奪うため，その回復は困難で喪失状態が続くことが予測される。今回の震災でも高齢者は失ったリソースを再び獲得する事が難しく，生きる意欲を失ったり，体の調子を崩したりというような不自由な生活が続くことになったと考えられる。リソースの喪失の持続は，連鎖的にリソースを失わせ心理的問題を生じさせやすい[6]ため，高齢者の災害後の心理的危機を回避するには，リソースの喪失が持続することを最小限にする必要があるといえる。

今回の調査から看護者は日常のケアを通して，高齢者の通常の生活で役立てている社会資源や，生活の支えとなっているものの種類や量を把握すると同時に，自立性や活動性の維持などに対してはたらきかけをしていくことが重要である。

結　語

阪神・淡路大震災に被災した在宅高齢者の震災後の心理的変化を明らかにするために，被災した72人の高齢者に対し震災後6カ月と15カ月の2時点のリソースの変化を質問紙（The 17 Item Resource Questionnaire）を用いた訪問面接により調査した。

1）対象の高齢者のリソースの喪失は17RQの3因子17項目の全てにわたり得点が低く，2時点とも全体として震災前の状態と比較して変化が少なかったことを示した。
2）対象の高齢者の喪失の得点は「体の調子」「自分の生活を思うようにできる感じ」「何かをやろうとする気持ち」「家財道具」「友人とのつながり」の順に高かった。
3）震災後6カ月と15カ月の2時点においてリソースの喪失得点に有意な差はなく，全体として2時点間のリソースの喪失の状況には変化がなかった。
4）震災後6カ月のリソースの喪失得点と15カ

月後の得点の間には有意な正の相関がみられ，6カ月後のリソースの喪失状況は15カ月後も持続していた。

5）災害時の高齢者の支援においては，看護者は日常のケアを通して対象者の利用している社会資源や生活の支えなどの種類や量を把握し，災害時には障害が長期化しないように，早期から生活適応へ向けての介入が必要であることが示唆された。

文　献

1．Freedy JR, Saladin ME, Kilpatrick DG, et al. Understanding acute psychological distress. J.Traum Stress 7 : 257,1994

2．長尾徹,村木敏明,金子翼,他．阪神・淡路大震災における在宅虚弱・障害老人の日常生活活動と社会機能の経時的変化に関する一考察．神戸大学医学部保健学科紀要　12 : 95-100,1996

3．Setoh N, Yoneda T, Taketomi Y, et al. The effects of The Great Hanshin-Awaji earthquake on activities of daily living of the elderly and disabled. Bull Allied Med Sci (Kobe) 12 : 171-177,1996

4．丸山一郎,権寧淑．震災ストレスによる包括的健康影響評価に関する予防医学的研究（第一報）地震震度と震災前後のライフスタイルとの関連．日本公衆衛生雑誌　43 : 705,1996

5．多田羅浩三,高鳥毛敏雄,高橋進吾他．仮設住宅入居者の健康課題に関する研究．日本公衆衛生雑誌　44 : 1468,1997

6．Hobfoll SE. The ecology of stress. Hemisphere publishing corporation,1988

7．野々山久也．阪神・淡路大震災が家族に及ぼした影響に関する調査研究報告書（財）兵庫県長寿社会研究機構家庭問題研究所1996

8．村松十和．老人の生きがいの一考察－生きがいと生きがいの喪失について福祉の立場から考える－聖隷学園浜松衛生短期大学紀要13 : 123,1990

The Psychological State of Elderly Subjects after Natural Disasters
The Loss of Resources in Elderly Victims of the Great Hanshin-Awaji Earthquake

Mio Shimizu,[1] Makie Kawabata,[2] Yuichi Ishikawa,[2] Mamiko Yada,[2] Nobuko Matsuda,[2] Ikuko Miyawaki,[3] Noriko Tsuda,[2] Kazuko Dohi,[2] Yoshiko Yamoto,[4] Kaya Nozaki,[5] Toshiaki Muraki,[2] Toshihiko Yoneda,[2] Toru Nagao,[2] and Noriko Setoh[6]

ABSTRACT: The purpose of this study was to investigate the loss of resources and identify the psychological state of elderly victims 6 and 15 months after the Great Hanshin-Awaji Earthquake. The 72 elderly victims (16 men and 56 women; mean age, 82.3 and 80.3 years old, respectively) were interviewed with a structured questionnaire which included demographic information. The responses to the 17 questionnaire items were analyzed using the paired t-test and the Pearson's product moment correlation coefficient. The results indicated that their scores of resource loss were generally low at both 6 and 15 months after the earthquake. However, items such as " personal health", " feeling of having control over one's own life" and " motivation to get things done" showed higher scores than the other items. The resource loss scores revealed no significant differences between the two time points, but it showed a higher positive correlation at 15 than at 6 months. These findings suggested that it is necessary to minimize the loss of resources in order to prevent stress in elderly victims of natural disasters.

Key Words : The Hanshin-Awaji Earthquake,
Elderly Victims,
Resource loss,
Stress.

---

1. Graduate School of Nursing, College of Nursing Art and Sciences, Hyogo.
2. Faculty of Health Sciences, Kobe University School of Medicine, Kobe, Japan.
3. Graduate School of Medical Research Division, Tokyo Medical and Dental University.
4. School of Nursing, Mie University Faculty of Medicine.
5. Kobe Continuing Education Center, Japanese Nursing Association.
6. Former Faculty of Health Sciences, Kobe University School of Medicine, Kobe, Japan.